

# 平成30年5月秋田県豪雨災害の対応について

株式会社 ウヌマ地域総研

取締役 事業本部長 熊谷敬喜

## ■出水概要

雄物川（秋田県）では、昨年の夏に一か月間に二度の氾濫被害が発生したのも記憶に新しいところですが、今年になり再度、規模の大きな氾濫被害が発生しました。

平成30年5月18日～19日にかけて、活発な前線の影響で、秋田県で非常に激しい雨が降り、累加雨量は多いところで200ミリを超える大雨となりました。そのため県内を流れる雄物川では、5月期として戦後最大の水位となった観測所もあったほどでした。



提供：秋田河川国道事務所

## ■実施内容

東北地方整備局と（一社）東北測量設計協会との災害協定に基づき実施した内容及び経緯は、下記のとおりです。

○内容：洪水状況写真撮影、洪水痕跡調査

○経緯：

- 19日 08：30 要請内容についての打合せ協議
- 12：00 洪水状況写真撮影開始（ドローン撮影）
- 16：00 洪水痕跡調査業務決定の連絡受信
- 20日 09：00 洪水痕跡調査業務の合同打合せ
- 21日 08：00 洪水痕跡調査作業開始

## ■洪水状況写真撮影

洪水状況の写真は河川の水位が低下する前の撮影が必要で、短時間に広範囲の移動をしなければなりません。そこで作業の事前段階で以下の情報を確認し、撮影を計画しました。

- 昨年の洪水氾濫撮影箇所及び撮影アングル
- 撮影箇所までの交通規制情報
- 撮影箇所周辺の飛行制約条件
- 河川の水位情報（リアルタイム）

当該河川は、昨年の洪水による氾濫被害に伴い、「河川激甚災害対策特別緊急事業（激特事業）」として築堤などの整備を行っている河川です。

そのため昨年度の被災（氾濫）箇所については、重要地区であるため丁寧な撮影を心掛けました。

また撮影箇所の周辺は日ごろ河川測量などで熟知しているため、主要道路から現場までの動線や危険箇所などを把握しており効率よく移動が出来ました。

撮影は2班体制で行い、その日の夕方に作業を終了・撮影画像を提出することができました。



## ■洪水痕跡調査

洪水痕跡調査は、河川の水位が低下してからの調査開始となりますが、降雨などで痕跡が消失する恐れがあり時間との勝負になります。復旧対策に必要な以下の点に留意して実施しました。

- 洪水状況写真との整合
- 昨年の洪水痕跡成果との照合
- 適正な調査職員の配置
- 調査キャリブレーションの実施

迅速に調査が行えるように、8班体制にて実施しました。班編成は昨年度も洪水痕跡調査を実施しており、できる限り昨年度と同じ地区を調査した職員やその地域出身の技術職員を配置するように心がけました。このことは地理的に有利だけでなく、あらかじめ洪水（氾濫）特性を把握していることにより適切に調査できると判断したからです。さらに昨年度の成果（痕跡範囲）の検証としても品質向上につながります。

また調査班ごとの技術格差を是正する目的から、現場にて調査方法の共有を徹底しました。



## ■調査を終えて

初動の取り組みと日ごろの準備の重要性を再認識した業務でした。災害の中でも大雨による氾濫被害などは地震災害と異なり、ある程度予測可能です。当社では近隣の事務所が「注意体制」に入ると「機材」・「心」の準備に入ります。具体的には以下の項目です。

- 必要機材の確認（充電）
- 人員の確保及び工程管理
- 災害関連資料の収集
- 顧客との連絡体制の確認など

「備えあれば憂いなし」ということわざがあるように、いかに迅速に行動できるかは、日ごろの備えにかかっております。特に近年の災害は休日が発生する確率が高いように思います。それだけに特に「心」の準備は大事に思います。

## ■おわりに

災害業務は通常業務を履行しながらの対応であるため相応の負荷がかかりますが、非常時ということで社会的使命感が沸々と湧いてきます。さらに地域コンサルタント企業としての自負なのか社員士気と結束力が高まります。普段は「コミュニケーション不足」といっているのが、この時は社内の一体感が部署間の垣根を越えてあるように思います。

最近では就職ガイダンスなどでも必ず「災害との関わりについて」に触れ、建設サービス関連業に対する「仕事の誇り」を話す機会も増えました。

災害は、無いに越したことはありませんが「技術者の志」を思い出すあるいは奮い立たせるきっかけになっていることではないでしょうか。